

【熊本国税局長賞】

つながりを感じて

鹿児島市立甲南中学校

一年 佐東 ゆず

私が熱を出した時、病院での診察を終えた母は財布を出さずに会計を済ませた。令和七年四月から、鹿児島市の中学生までの子どもが病院受診をした際の窓口負担がなくなったのだという。急な受診が必要になった場合にも、この制度のおかげで、お金の心配をせずに適切な医療を受けることができるというわけだ。

みんなが暮らしやすい環境をつくるために税金が使われているということは、小学校の租税教室で学んだので何となく知っている。前に述べた医療費のことだってそうだし、図書館などの公共施設を利用したり、ごみ収集の作業を見かけたりした時にも、これらのサービスに税金が使われているのだと思うとありがたく思う。けれど、ニュースで「増税」や「増税反対」という強くてとげのある言葉を耳にする度に、税の本当の姿ってどんなものだろうと考えてしまう。教科書の無償支給を始めとして、子どもである私たちは税の恩恵をたくさん身近で実感しているが、大人になるとその恩恵を実感しづらくなってしまう、「お金をとられる」という負の一面だけが、ふくらんで見えてしまうのかもしれない。税金と聞くと、すっかり悪者のイメージが付きまとう。

私にはひいおばあちゃんがいるのだが、おばあちゃんは最近「鶴亀大学」という教室に通っているそう。市によって月に一回開かれる高齢者対象の講座で、まるで学校のように様々な活動や交流ができる場である。そこで見聞き、体験したことの話をするおばあちゃんは、とても生き生きとしている。いつものように、鶴亀大学での笑い話を聞いている時に、

「お金を出さずにこんな体験ができて、ありがたいことだよねえ」

と、おばあちゃんがしみじみと口にした。そう、この鶴亀大学だって税金によって運営されている。しわしわに笑うおばあちゃんの顔を見ながら、みんなで納める税金は、こうやって巡り巡ってささやかな笑顔につながっているのだと思った。

お金を払って何かが返ってくる、そんな風に見えて分かりやすいものではないからいつしか税金は悪者のように思われてしまっている。大切なのは、想像する力だ。目には見えない人と人とのつながりを想像できれば、税金として納められた思いやりの心が、ぐるぐると巡りながら、ひっそりと暮らしを豊かにしてくれていることに改めて気が付くはずだ。

誰かとつながっているって心強い。これからも、そのつながりをつくってくれている税金について、関心を持ち続けていきたいと思う。